第３２号　　令和４年１月

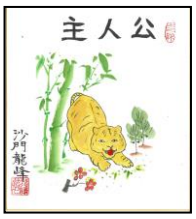
林陽寺報　さくら

ホームページ　林陽寺　検索☜
岐阜市岩田西 3-402　林陽寺　058-243-1380

新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

「主人公」（しゅじんこう）

令和四年の新しい年が明けました。檀信徒の皆様には、ご家族お揃いで、新年をお迎えのことお慶び申し上げます。旧年中は、何かと林陽寺の護持にご理解やお力添えをいただき、心よりお礼申し上げます。



年頭にあたり、今年は『主人公』という禅語をお届けします。ドラマで主役を演じる人物のことではありません。

禅でいう主人公とは、「本来の面目」、つまり仏性を具えた本来の自己、真実の自己ということです。「純粋な自分」とでも言いましょうか。

このところ、コロナ禍により、周りの目を気にしたり、友達とも会うのを躊躇、大切なご先祖様のご供養のお月経もご遠慮させていただいたり。時には、自分さえも見失いかねないような状況でした。

そんな時自分に向かって「おーい」と呼び出しましょう。本来の自分に目覚めましょう。今年こそ自分の中の主人公を忘れずに生きていきたいものです。

合　掌

令和四年行事（予定）

一月一日～三日　新年の祈祷（早朝）
一月三日～七日　ぎふ七福神お開帳
一月二十一日　大般若祈祷会
二月十二日　**涅槃会・婦人部会**
三月十八日～二十四日　春彼岸
三月二十七日　しだれ桜まつり
四月八日　降誕会（花まつり）
四月十六日　弘法大師祥当接待
六月五日　奉仕作業
七月二十四日　子ども禅の集い
八月七日　山門施食会
八月十三日～十五日　お盆
八月二十四日　地蔵盆
九月二十日～二十六日　秋彼岸
十月一日（第一土）開山忌・先祖供養
十月五日　達磨忌
十一月二十三日　七福神布袋尊大祭
十二月三日　成道会
十二月三十一日　除夜の鐘

お経の会　第一土曜日　午後二時～
ヨガの会　第二土曜日　午前八時～
坐禅の会　第二日曜日　午前八時～
写経の会　第四土曜日　午前十時～

布袋尊大祭のお加持

施食会の施食棚のお飾り

大般若会の本堂の荘厳

法地開山瑞岡珍牛禪師

二百回忌にちなんで

瑞岡珍牛（ずいこうちんぎゅう）禪師は、永平寺名古屋別院の御開山である。

林陽寺の法地起立にあたり当山二世である温国豊住は、禪師を迎えて法地開山とした。禪師は、肥後天草の人。寛保三年正月六日生。安永八年七月二十一日永平寺瑞世。寛政七年八月二十二日五十三歳にて豊橋全久院二十七世。享和元年七月二十六日退寺。林陽寺に滞留、同二年武儀郡下有知龍泰寺三十二世となる。文化十四年尾州公懇請して名古屋万松寺入寺。文政五年四月十日八十歳にて端

座して寂す。五月十日君命を以て国葬を行い、荼毘して慶雲軒（現在の永平寺名古屋別院）に葬られた。亡くなってから今年で二百年、名古屋別院では、南澤道人不老閣猊下御親修のもと「二百回忌」法要が厳修され、記念誌として『珍牛禪師語録』が再刊された。

禪師は、永平寺五十世玄透即中禪師の提唱した古規則の復古を推進した高僧で、慶雲軒二世には弟子の黙室良要が就き、尾張徳川家の祈願所として基礎を固め、慶雲軒を尾張の曹洞宗教学の中心地とした。境内地は尾張徳川家七代藩主宗春公が隠居した御下屋敷の一角である。

画をよくし、『行状記』に図絵を付した『永平道元禪師行状図絵』の著がある。また、全久院住持中、道元禪師の御真筆である「正法眼蔵山水経」など十種の法宝を入手し全久院の寺宝とした。

珍牛禪師の伝衣発見

令和元年の秋、林陽寺御開山である了然玄超禪師の三百五十回忌を勤めるにあたり豊住和尚の袈裟行李を開いたところ古い袈裟が出てきた。たまたま「奉安殿護国院史」の資料収集に来寺されていた愛知学院大学名誉教授であり「お袈裟の研究」で著名な川口高風先生の目にとまり「曹洞宗報」令和二年四月号に紹介された。

「・・・もう一肩は林陽寺（岐阜市岩田西）が所蔵する。同寺二世温国豊住が寛政九年（一七九七）三月に林陽寺の法地起立にあたり、当時松本の全久院二十七世であった瑞岡珍牛を招請して伝法開山に迎えた。その豊住の袈裟行李に絡子

や伽藍法脈とともに入っていたところから珍牛よりの伝衣とみられている。

しかし、古規則復古を推進した珍牛の袈裟ならば有部律に説く如法衣と考えられるが、本袈裟は如法衣でないところから推進運動にとり組む以前の袈裟かもしれない。縦一一二センチ、横一九五・五センチの九条衣で衣材は麻、黄土色で梅模様があり、裏布は一枚の正絹である。紐や「チ」、環座に組のあることは松源寺（島根県安

来市安来）蔵の袈裟と同じである。ただし、環は金具の小環に釣がついている(⑪⑫⑬⑭)。このような小環と釣は他の宗門の袈裟にもみられ、松源寺、林陽寺に所蔵する両袈裟とも搭袈裟姿は安達師の頂相と同じようになることがわかる。」

と解説され、大変貴重な珍しいお袈裟であることが判明した。

二世温国豊住和尚と珍牛禅師との関係は、よくわからないが寛政九年三月十日、珍牛禅師が全久院時代に豊住長老に授けた嗣法時の血脈がある事を思うと禅師の弟子であり、豊住の要請を受けて、勧請法地開山となったと思われる。

珍牛禅師は八十歳で示寂。本葬は文政五月十日前代未曾有の尾張藩の国葬であったといわれ、その行列次第は絵巻物にて残されている。その行列の随喜僧の中に「法鉢　温住上坐」と記された僧を見つけることが出来るが二世温国豊住和尚ではないだろうか。

禅師の当山に残した書画「懶瓚（らいさん）の芋を焼く図」

懶瓚は、中国唐の時代の僧で、明瓚（みんさん）と云うのが本名である。何事によらずなまぐさで懶（おこたり）ものだったから、「明瓚」と呼ばないで、「懶瓚」と呼ぶようになったと云うが、中国湖南省の南嶽の石窟に隠遁していた徳の高い名僧だった。

その高徳を聞いた徳宗皇帝が迎え入れようと勅使を遣わしたところが、明瓚は、牛の糞を燃やして暖を採りながら、鼻水を顎まで垂らして芋を焼いて食べていて全く勅使の言葉に耳をかさない。勅使が見かねて「鼻水を拭いたらどうだね。」と云うと、明瓚は「お前さんの為に、なぜ鼻水を拭かねばならないんだ。」とかえした。

帰ってきた勅使からこの報告を聞いた皇帝は、「道人とはかくあるべきだ」と感心したと云う話が残っている。（中国の名僧伝）

いろいろ思いを巡らして、世代様の足跡を尋ねているが、名を成した方々の片鱗に触れることができる有り難いご縁である。

お庫裏のツブヤキ
古い綿の布やタオルを集めています

曹洞宗婦人会という組織があり、古い綿の布やタオルを集めています。それは、次のような実情を知ったからでした。

介護施設等では、汚物の拭き取り等に柔らかい綿の布を必要としておられるそうです。ウエットティッシュペーパーや介護用のペーパーを使い捨てにするのはもったいないのでと、職員さんが自宅から綿の柔らかい布や綿の「シャツ等を持ち寄って、小さく切って使っておられるとのことでした。

そこで、使い古しのフェイスタオルを4分の1に切った物や20センチ四方に切った柔らかい

綿布を婦人会活動の一つとして、集めることを3年前からしています。切ってない物でも大丈夫です。施設への参加者が、活動の一環として切る作業をされる所もあるからです。

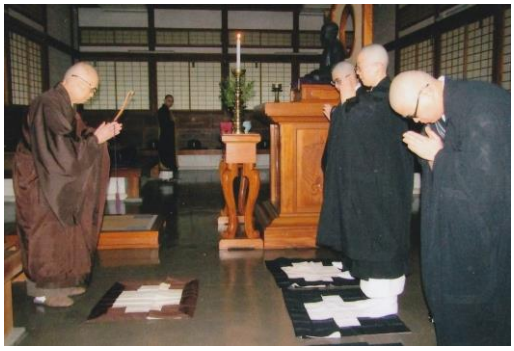
お届けした施設からは、たいへん喜ばれています。もし、皆さんのお宅に古いタオル等がありましたら、ご協力いただけると有り難いです。

合掌

修行の日々での気づき　第二話

徒弟　岩水峰雪

僧堂の一日は、朝4時起床、5時振鈴、45分坐禅、6時朝課、7時に応量器を使った小食（しょうじき、粥の朝食）、8時掃除、9時から各衆寮で仕事が始まります。最初はもっぱら、御祈祷、日中のお勤め、中食（ちゅうじき、お昼ご飯）の準備に山内作務が午後まで続き、薬石（やくせき、夕飯）後の19時から慣らしをして配役の勉強をし、21時就寝です。休む暇はなく、動きっぱなしです。



最初は正座をし続けるのにも慣れず、お拝も多いので太腿から足首がパンパンになります。失敗しないように集中をするので、朝から滝のような汗をかきます。

配役は法要を行う為に修行僧が覚えるべき役柄であり、言わば必須科目のようなものです。ここでは鐘司加番（僧堂で鐘と太鼓を鳴らす）役から始まり、鐘司（全ての窓開け、坐禅中の鐘に太鼓鳴らし、夕方の鐘、鍵閉め、21時就寝前の鐘と太鼓で言わば時計の役をするので3時30分起床で一番ハード）、粥当番（朝の粥作り、仏様のお膳や浴司入れ）、浄人（応量器の配膳役）、待香（主にお勤めの導師についてお香を出したり、お付きをする役）、供頭（お勤めの時に回向本を出す見た目華やかな役）、副堂（お勤めの木魚役）、堂行（お勤めの鐘役）、挙経（お勤めを声でリードしていく）その後に御神殿の2役があり祈祷太鼓が最後です。早いと5ヶ月で終了していきますが、私は7ヶ月かかりました。その間一切の外出は認められません。

一番大変だったことは、常に緊張状態が続いていたことです。少しのミスが他の配役のミスにも繋がっていくので、頭の中は常に自分の目の前のことと次の事までしか考えられず、その繰り返しをミスが出ないように集中します。それでもミスがあると蹴散らしといって、強く注意を受けるので、その間は合掌して肘を全開に張り、「はい」と「いいえ」だけで応えます。

配役の仕事はいわれたことをいわれた通りにしなくてはなりません。いかにその通りにすることの難しさを思い知りました。型にはめて体で体得していくわけですが、どこかで自分の価値観や私情を挟んでしまうと、どうしてもその場にいることが苦痛になってしまいます。

ある時、毎日同じ事、同じ人、同じ環境というのに疲れてきていた時、私はちょっと怖いと思う方を避けている時がありました。怖いし、何か言われるのも嫌だから、できるだけその人の視覚に入らないようにしていたら、同僚のキューバ人がそれを察知し、

「逃げるな、逃げれば同じことがまた繰り返されるだけだから、お前はそのままでいたらいい。」

と言いました。（続く）

第16回

しだれ桜まつり

令和4年3月27日（日）

林陽寺本堂他
バンド演奏など